

# 幼児のあそびの指導

花 木 イ ソ

## あそびを育てること

幼稚園での幼児の生活はすべて「あそび」であり、あそびを通して育つものであると思います。幼児が自分であそびをみつけ、次々と自分の発想であそびを創造していく姿は、実に生き生きとして楽しいものです。そして何でもいえる、何でもできるといった気楽なふんいきの中で、子ども対子どもがぶつかり合いを通して、みんなの中で自分はどうしなければならぬかを学んでいくことができるのだと思います。指導という名のもとに、幼児の自発性、創造性の芽をつみとることのないよう、また命令や禁止でおとなの考えをおしついたりしないようにしたいものです。といっても全く自由に放任するのではなく、自由にあそんでいる姿から、教師はたえず幼児の興味や欲求をくみとり、それを指導の手がかりとし、どんな経験をどんな方法ですすめていくかを考えていかなければなりません。

幼児のあそびを育てるには、教師は子どもの後にまわって、子どもに教えられながらも、教師の指導の手は決してゆるめてはならないということになります。

## 年齢によるあそびの指導

四歳児の初期のあそびをみていきますと、おおぜいであそんでいるようにみえても、平行あそびが多く、横とのつながりはなくとも、結構ひとりあそびを楽しんでいるようすがみられます。しかし近頃はこのひとりあそびが十分されずに入園してくる子どもが多いためか、あそぶことをしらない、あそびかたをしらないという子どもがふえてきています。椅子にこしかけたままじっとしている子ども、あそびかけても、すぐ別のあそびに移ってしまう散漫な子どもが多くなっているように思いますので、四歳児ではこの「ひとりあそび」を十分にさせることから考えていかなければならないと思っています。

五歳児になると、友だちとあそぶことを喜び、気の合ったもの同士で、のりものや家をつくったり、それから発展して、のりものごっこや、おうちごっこなどをしてる姿がみられます。またえびがにやかえるなどの小動物とあそんだり、みんなでつばめをみにいったり、ありをとったりするなどの共通の経験を通して、つばめになったり、ありになったりして、さらにグループあそびが発展していく姿もみられます。また幼児はお話をきき、そのものがたりの中の登場人物になってあそぶことも大好きですので、あそびを育てるための一つの方法として、ものがたりであそぶあそびもたいせつであると思います。このあそびの一例として次に「やぎごっこ」をあげてみることにします。

「やぎごっこ」(狼と七匹のこやぎ)グリム  
童話よりの展開例

一年保育児三十五名

期間六月十三日～約十日間

○このあそびを取り上げた理由

小動物を中心に、少しずつグループあそびが発展しつつあるこの時期に、話としても興味があり、ごく自然にあそびに発展することを取り上げ、あそびに共通のめあてをもたせ、よりよくグループあそびを展開させる。

○あそびの展開のあらまし

- ・絵本をみて「トントン……」のところ、狼になったり、やぎになったりして、ことばのやりとりをしてあそぶ。
- ・こわい狼について話しあったり、狼の表現をし、狼とやぎの追

いかげっこをしてあそぶ。

・登園するとすぐ、やぎや、狼の家づくりがはじまり、それぞれの家で、ままごこのようなあそびがされている。

・やぎや狼の家づくりは、登園した子どもから誰となくされている。はじめは単にかこいだけの簡単なものであったが、日に日に複雑になっていく。やぎの家では時計とかくられるところ、狼の家では狼の通る道や、荒々しい感じをだすくふうがされている。

・家づくり熱中し、狼とやぎの交渉が、でてこないのに、あそびが発展するよう、機会をみて誘いかけてみることにした。(後述、ある日のあそびの姿参照)

・あそびとしてまとまりのあるよう、面づくりや、それぞれに必要なものをつくる。面づくりは予想以上に喜び、登園するとすぐにかぶってあそびかける。友だちの光っている眼や、グロテスクな歯などをみては、つくりたしたり、こわれては修繕したりして、とても自分の面はたいせつにする。面をつけるとなおいっそうあそびが活気づいてきた。

○ある日のあそびの姿(六日目)

幼児のあそび	教師の助言、配慮
<ul style="list-style-type: none"> <li>・男児多数で狼の家をつくる。</li> <li>・巧技台と、ままごと用柵でかこいをしてその中でウォーウォーといっている。</li> <li>・二名の男児が積木の板をつな</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家づくりに変化をもたせるため巧技台を用意しておくこと、さっそく喜んで使用している。</li> <li>・この狼の道づくりは前に金太</li> </ul>

いで狼の道をつくりだしたところ、他の五、六名の男児がこれに興味をもち、やぎの家まで長く続かせる。

・ 女兒多数、机や積木などで家をつくっている。

S子が「チョークちょうだい」といいにくる。積木に時計がかかっている。

他の女兒は時計以外にかくれる場所を考え出した。

・ 「時計かてあるねん」「かくれる場所も作ってん」「台所も風呂場もあるねん」「おかあさんやぎになって買物にいったりしてねん」「ぼく狼がくるから、みはりばんしてるねん」と口々にいう。

・ 狼が一斉にやぎの家をおとすれ「トントン……」の対話が始まる。狼のうがい、こなぬり（黒い画用紙と白い画用紙を丸め、手にはめかえている）  
・ つかまったやぎは狼の家に入られるが、そつと助けにくる

郎ごっこをした時によくあそんだ一本橋を思い出したのであろうと思われる。

「狼が通つてもこわれない道をつくろうね」

・ はじめて時計ができた。次にはダンボールを用意しておこうと思う。時計以外にかくれるところも考えついたので「いいこと思いついたね」とそれぞれの子どもにほめる。

・ ほとんど家の構成ができたので、みんなで話し合ってみた。  
「狼さんも、やぎさんもいいおうちや、道ができたね」と話しかける。

・ 「みんなとても楽しそうね。狼さんたち、やぎのおうちへいったらどう？」と誘いかけ、あそびを続けさせる。

・ 狼がやぎの家をおとすれると俄然あそびが活気づいてきたので、危険のないように留意す

やぎもある。

・ 家や道がこわれても修繕し、また続け、何回もくりかえされる。

る。

以上、これは一年保育児の、ものごたりを中心としたあそびの一例ですが、あそびを発展させるためには、

- ① 教師があそびに適した話をえらぶこと、
  - ② 幼児のあそびをこまかくみつめ、その場その場に適した助言を与えること、
  - ③ 子どもらしくふうをみとめ励ますこと、
- などがあげられます。

### まとめ

このように子どもをあそびを発展させ、内容を高めていくためには、教師の意図的計画的な保育もたいせつです。これは幼児側からいえば、受容的な活動であります。幼児が喜んでこれを受け入れようとするを与え方をくふうする必要があり、幼児の受容活動と自発活動とがうまくからみ合って、望ましいあそびに発展するものだと思います。そして幼稚園の生活を一年一年と経ていくうちに、ひとりでは味わうことのできない、友だちとのあそびの喜びや、幼児が自分でえらぶあそびの内容が高められ、しかも本気になって打ちこんであそぶ充実感を味わわせたいものだと思います。

(奈良県郡山幼稚園)